

生かされている私たち



夏の日差しがまぶしい季節です。木々や草花も大自然の恵みをいっぱい受け、力強いのを輝かしています。私たち人間も同様に、自然の中で生かされている存在です。今月の『ニューモラル』では、一人の男性の気づきをおして、自然とつながった生き方について考えます。

二年前の出来事

「もう、二年になるのか」

散歩の途中で立ち寄った公園のベンチに腰掛けて斉藤正夫さん（59歳）は、ぼつんとつぶやきました。色濃くなってきた緑が日差しをさえぎって、とても心地良い朝でした。

ちょうど二年前のことです。企業の管理職として多忙な毎日を送っていた斉藤さんは、出張先で突然倒れました。営業

所での打ち合わせが終わったところで少し気分が悪くなり、休むためホテルに戻り、部屋の前までたどりついたところで、左半身に力が入らなくなり、廊下で倒れてしまいました。助けを呼ぶこともままならない状態でしたが、たまたま通りかかった他の宿泊客に発見されて、救急車で病院に運ばれました。

診察の結果は脳梗塞でしたが、幸にも発見が早かったために、すぐに血栓を溶かす薬による治療が行われました。その後の経過は比較的順調で、二週間後に

は自宅近くの病院へ転院することができました。それとともに、すでに始めていたりハビリを本格的に行うことになりました。

不安な日々

必ず元どおりの生活に戻る、という強い決意を持って臨^{のぞ}んだりハビリでした。やがて少しずつ^{からだ}身体は動くようになりましたが、日によってはあまり変化がなかったり、痛みが強くなったりという状況が続^{いた}き、いらだつ日々が続きました。会社の人や友人たちが見舞^{みま}いに訪れたときには気丈^{きじょう}にふるまうのですが、夜ベッドに入ると、いろいろと心配になっ



てなかなか寝付くことができませぬ。仕事のこと、家族のこと、何よりもこれから自分がどうなるのか、不安でたまりま

せんでした。健康には自信があつたはず

なのに、なぜこんなことになつてしまつたのか、気がつく、いつもそのことばかり気持ちが向いてしまいます。

そんなある日のこと、談話コーナーの壁に掛けてあつた日めくりカレンダーの言葉に目を留めました。

「なにはともあれ 生かされている」

書家・詩人の相田みつをさんの独特な文字で書かれたその言葉に斉藤さんはじつと見入り、何度かつぶやいてみまし

た。

その日の夜、ベッドの中で、斉藤さんは倒れたときのことを思い返してしました。

「もしも廊下ではなく部屋の中で倒れたら、もしも誰も通りかからなくて発見が遅れていたら、自分はもうこの世にいなかったかもしれない」

そう考えると、「生かされている」という言葉が、自分にとつて切実なものに思えてなりません。斉藤さんは、これまで特別に信仰心が篤かつたわけではありませんが、何か自分の力の及ばない力によつて自分が生かされているような意識が湧いてきました。

「なにはともあれ生かされているか……」
そうつぶやくと、身体のこわばりが少





しほぐれたような気がして、気づかないうちに眠りに入ってしまいました。

翌日、久しぶりにぐつぐつと眠れた斉藤さんは、ゆつくりとベッドから起き上がると、窓のカーテンを開けて外の景色に目を向けました。梅雨の合間の朝日を浴びて、木々の緑が輝いていました。見慣れた景色が、今日はなぜかいつもと違い、すべてが新鮮に見えました。

いつの間にか新緑の季節は過ぎ、緑が色濃くなっていました。気づかないうちに季節は少しずつ夏に向かっていくようです。

「自分も他の生き物も、同じように、いのちを与えられている存在なんだ」
そう思うと、穏やかな気分が心の中に満ちてきました。

いのちを支えるもの

私たちは日常生活の中で、「自分は生かされている」と実感するのは難しいことかもしれません。

しかし、事実として、私たちのいのちは、自然のはたらきに支えられています。空気や水、大地、太陽の光などのさまざまな自然の恵みがあつてはじめて、私たちは生きていくことができます。人々は昔から、自然の中に人間を超えた大きな力の存在を認め、それを畏れ、崇めてきました。そして自然のはたらきに感謝し、祈りをささげました。近代になると、科学の発達により私たちは自然の謎を次々と解き明かしてきました。

したが、どんなに科学が発達しても、人間も大きな自然の一部であり、自然に依存して生きているという事実は変わりません。

ここで、私たちの生命について考えてみましょう。私たち一人ひとりのいのちは、たった一つの細胞である受精卵から始まります。それが細胞分裂を繰り返し、それぞれの機能を持った身体の各部分へと分かれていきます。私たちが頭の中で考えたり、話したり、走ったりできるのも、一個の細胞から六十兆もの細胞に分かれ、各細胞が見事に調和しているからです。よく考えれば、これは驚くべ



きことではないでしょうか。

科学技術がどんなに進歩しても、人間
はいのちそのものを創り出すことはでき

ません。科学が解明できるのは、生命が
生まれ成長していくという、自然のプロ
セスのほんの一部だけなのです。



大きな存在によって 生かされている

この地球上で私たちが生きていくことができるのは、自然が絶妙なバランスを保っているからです。例えば、太陽と地

球がもつと近かつたら暑すぎて生物は生きられないでしょう。逆に今より遠ければ、すべてが凍りついた世界となります。地上に降り注ぐ太陽の光のおかげで、

あらゆる生物が育ち、成長していくことができます。私たちは、そうして育った他の生き物のいのちをいただくことによって、自分のいのちを維持しているのです。

こうして考えてみると、私たちが今生きていることは、ある意味で奇跡的なことであり、まさに「有り難い（「めったに無い」の意）」ことなのです。私たち人間





が他の生き物たちと同じように、「生かされていいる」と考えても、誤りではないでしょう。

歴史作家の司馬遼太郎さんは、小学六年生の国語教科書用に書き下ろした「二十世紀に生きる君たちへ」の中で、

「人間は、自分で生きているものではなく、大きな存在によって生かされている」という考え方が、洋の東西を問わず、時代を超えて持ち続けられてきたと語っています。そして、自然を畏れ、崇める態度が近代になって播らぎ、「人間こそ、いちばんえらい存在だ」という思い上がった考えが広がってきたと指摘しています。

司馬さんは、「人間は愚かではないから、自然を恐れ敬うという態度を二十世紀には再び取り戻すことができるだろう」という期待を、子供たちに投げかけています。司馬さんが子供たちに託した、自然という大きな存在に対する謙虚な態度は、私たち一人ひとりにとつても必要なものではないでしょうか。



謙虚な 気持ち

「生かされている」ことを意識することは、私たち一人ひとりの生き方にとってどのような意味を持つのでしょうか。

自然とのつながりを感じ、「生かされている」ことを意識することによって、私たちは謙虚になることができます。反対に、自分の力で「生きている」という思いがあまりにも強くなりすぎると、周囲に対して傲慢ごうまんになったり、みずからを反省することがなくなるでしょう。

教育学の世界的権威けんいであり、ユネスコ

の創設に重要な役割を果たしたロンドン大学名誉教授めいよきょうじゆの J・A・ラワリーズ博士（一九〇二〜一九八一）は、人間が傲慢になるのを抑えるために「この大きな宇宙全体についてしばし瞑想めいそうをしてみること」を提唱ていしょうしています。

「この宇宙に広がっている非常にたくさん星、しかもその一つ一つが大きなたぐさんの星、宇宙全体の大きさ、自然の大きな力、等々をいろいろ考えます時、私たち一人一人はいかに微々びびたる存在であるかということを感じて、そこに謙けん譲じやうさが生まれてくると思います。

また、そういう大きな宇宙ばかりでなく、道端みちばたに咲いている小さな花を見ましても、なんと美しいものであるか、小さな種からこんな美しい花がどうして出来



てくるのであろうかと私たちは驚嘆きょうたんします。あるいは夕方、沈む夕陽を背景に飛ばかわいらしいトンボの姿を見ましても、なんとすばらしいものかと感動します。そういう情景の中に私たちは自然の奇跡を見取ります。そしてそういうものを見ることによって、自分のしていることがいかに小さなことであるかという謙虚さを感じることができるのであります」(モラロジー研究所編『社会教育資料』七十一号「民主主義教育とモラロジー」より)

宇宙の広がりやその長い歴史と比べれば、私たち一人ひとりの人生は、本当に短いものです。宇宙や自然について考えると、自分が小さく弱い存在であることに気がつきます。

自分のいのちは自分のものであるけれ



ど、同時に自分に与えられたものです。その事実に感謝し謙虚な気持ちを持つことが、私たちが知らず知らずのうちに傲慢はぶになることの歯止めはどとなるのです。

夜空を見上げて遠い宇宙に思いをさせる、あるいは道端の小さな花に目を向ける、忙しい日常の中でも、ちよつとしたことから自然とのつながりを感じるように意識を向けてみてはどうでしょうか。



生かされていることに 感謝する



自然の中で人間は小さな存在ですが、同時にすべてのものとながった大きな自然の一部であるとも考えられます。私たちは自然から生きる力を与えられています。そのことに感謝して、自分に与えられた力をできる限り生かしていくことが、自然とつながった生き方ということになります。

松下電器産業の創業者である松下幸之助^{すけ}氏は、日本の戦後を代表する経営者として、現在でも多くの人々から尊敬を集めています。

松下氏は、あるとき自分の成功に関し



て自分を存在させてくれたものに感謝しなければいけないと考えました。まずは両親のことを、そして両親の先につながる祖先へと、次々にさかのぼって考えていったときに、はじめての人間を誕生させたのはなんだろうかと考えました。いろいろと考えた末に、そこに宇宙の根源の力が働いているのではないかと、松下氏は考え付きました。そして、その根源の力には、万物を生成発展させる（生み育てる）はたらきがあり、それが自然の理法であると考えました。

「考えてみればこの宇宙に存在する一切のものが、自然の理法に従っておのれにとられず、それぞれの行動をしておるんや。人間も宇宙自然の存在ならば、同じように自然の理法に従って自分にとら



われず考え、行動しないといかん」

(江口克彦『成功の法則 松下幸之助はなぜ成功したのか』PHP研究所)

さらに松下氏は、企業経営についても、すべてのものが生成発展していくという



自然のはたらきに従うものでなければならぬと考えました。企業は社会の公器であり、企業がよい製品を生産し、安い価格で販売することが社会の発展と人々の幸福につながるという松下氏の経営哲学は、こうした宇宙や自然のはたらきに対する深い思索しぎくに根ざしたものでした。

生かされているということは、私たちの生き方を大きな自然の力が後押あとおししてくれているということです。今日ここに生かされていることを感謝し、毎日の生活の中で、あるいは仕事や学業などを通して、与えられたいのちを生かすように自分のできることを誠実に努力する。そうした態度を持つことで、私たちは自分の生きる意味と幸福を感じとることができるのではないのでしょうか。

やさやかな恩返し

幸いにも、斉藤さんは二か月足らずで退院することができ、四か月で会社に復帰することができました。会社側も斉藤さんの健康に配慮してくれ、以前に比べて仕事の量を少なくしてくれるようになりました。

病気をきっかけにして、斉藤さんは、自分の生き方を見つめ直し、定年を迎えた後には何か社会の役に立つ活動をしたと考えようになりました。そして、定年後も元気に動ける身体でなければならぬと一念発起し、休日の朝には、リハビリを兼ねて、一時間ほど近所を散歩するようになりました。すると、忙し

かったときにはあまり気づかなかったのですが、身近なところに豊かな自然が残っていました。今朝は、植え込みの陰に白い小さな花が咲いているのに気づきました。ゆつくりと歩くことで、季節の移り変わりを感ずることができるようになりました。

最近では、ビニール袋を持ち歩き、散歩の途中で目に付いたゴミを拾うことを始めました。ささやかなことかもしれませんが、自分が生かされていることへの恩返しのつもりです。

休憩を終えて立ち上がった斉藤さんの首筋を心地良いそよ風が吹き抜けていきました。

